

同窓会会長賞

「ある少女にまつわる殺人の告白」

佐藤青南（宝島社）

健康栄養学科 西川奈那

ある少女にまつわる殺人の告白は「今日的テーマを扱いつつ、難易度の高いテクニックを駆使し、着地の鮮やかさも一級品である」と『このミステリーがすごい!』大賞選考委員・茶木則雄が絶賛した、大賞優秀賞受賞作である。著者は、本作がデビュー作の佐藤 青南。“虐待”という重いテーマを扱っているにもかかわらず、ページをめくる手がとまらないミステリーの傑作であり、また、自分、親、子、そして日本の社会といったことを様々に考えるきっかけとなる問題提起がなされている。

この物語は、10年前に起きたある少女をめぐる忌まわしい事件から始まる。離婚した母親の再婚相手の暴力により、身も心もボロボロにされるある少女亜紀について、彼女を助ける児童相談所所長の隈部、心の弱い母親で亜紀を夫の暴力から救えない君枝、そして再婚相手杉本などが主な登場人物として描かれるのだが、すべての関係者が「ある男性」のインタビューに応える形で描かれていく。私が今、このインタビュアーを「ある男性」と呼んだのはとても重要で、最後に展開される”ミステリー”の部分で、なぜ彼女のことを知ろうとしていたのか、その目的はなんなのかなど、様々な真相がわかり、暗澹たる気持ちになる。

作品の多くの部分は、深刻な社会問題となっている幼児虐待の実態であり、母親の再婚相手に暴力と性の対象とされるという極めて一般的な題材ではあるが、子供たちが犠牲になるこの問題の残虐さと、暴力をふるう親たちの多くは幼児時代に同様の暴力を親から受けているというトラウマ的な継承性を、いやというほど読まされ、正直辛い部分もあった。また最後には題名の、ある少女に”まつわる”殺人という意味も明らかになってくる。そして、もっとも避けたい「トラウマ的な継承性」を強く暗示する形で作品は終わる。新人の作品としては構成力、文章力もきわめてしっかりとしており、一気に読ませる作品であることは二言を待たない。